

滋賀教区浄土宗青年会の近江米一升運動による被災地支援の取り組み

曾田 俊弘

(滋賀教区甲賀組浄福寺住職・滋賀教区浄土宗青年会参与・浄土宗総合研究嘱託研究員)

はじめに

本報告では、報告者が所属する「滋賀教区浄土宗青年会」が東日本大震災発生直後から取り組んでいる、「近江米一升運動」による被災地への食糧支援活動について紹介したい。

1、これまでの活動の経過

「近江米一升運動」とは、浄土宗滋賀教区所属寺院（および檀信徒）から一ヶ寺（一人）あたり一升（1,5kg）以上の仏供米のお下がりの喜捨を募り、集まった浄米を生活困窮者に対する食糧支援を行っている NPO フードバンクやボランティア団体に寄贈・委託することによって、現在深刻化の度合いを増している貧困問題改善のささやかな一助足らんとする活動である。

平成 22 年度より原則年一回実施し、初年度（2 回）3,2t、23 年度（2 回）11t、24 年度 4t、25 年度 4t、26 年度 5,5t、27 年度 5,6 t と順調に浄米の集荷量を伸ばしている。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災発生直後に、これまで協働してきたフードバンクからの要請に応え、「緊急近江米一升運動」を実施し、寄せられた 7,3 t の浄米と大量の食糧を、フードバンクのネットワークを通じて被災地に迅速に届けた。

この「緊急近江米一升運動」による被災地支援が浄土宗より評価され、「第五回共生・地域文化大賞共生事業助成部門採択団体」に選出され、助成を受け、同年秋の近江米一升運動を、浄土宗災害復興福島事務所の開所記念事業として実施し、12 月 20 日、いわき市内の仮設住宅で、移動喫茶「浜〇かふえ」を定期開催している福島教区浜通り組浄青と協働して、入居者の方々に浄米 2t を手渡し、昼食の調理と食事を共にしながら交流する「昼食会&近江米頒布会」を開催した。

以降、毎年、滋賀浄青有志が、集荷量の 6 割強の浄米をトラックに積んで、被災地の寺院（いわき市・仙台市・陸前高田市〈以上三ヶ寺は浄土宗災害復興事務所〉・石巻市・常総市）・仮設住宅（いわき市・石巻市・陸前高田市・大船渡市・大槌町）・物故者追悼法要の会所（仙台市・陸前高田市）を訪れ、被災地の寺院・浄青や被災地支援を行っている団体（ひとさじの会・万華鏡コミュニケート）のご協力を頂いて「近江米頒布会」を開催し、浄米の直接手渡し・食事・レクリエーション（万華鏡ワークショップ〈H26〉、滋賀浄青 OB 山添真寛師による人形芝居上演〈H27〉）を通じて被災者の方々との交流を図っている。

この 5 年間で、総計約 22,6t の浄米を被災地に届けることができた。農林水産省の食料自給率に関する統計では、平成 26 年度の国民一人あたりの米の消費量は 55,2kg、一日当たりの消費量は約 151g、一食当たりの消費量は約 50g であったということであるが、このデータによれば、米 22,6 t は 452 万食分に相当するという計算になる。そうすると、ピーク時の被災者が 400 万人と推定されていることから、すべての被災者に一食分のお米を提供できたということになる。「たかが 5 年間 1825 食分の内の一食に過ぎないではないか」

との誹りを受けるかもしれないが、「されど一食」、否、米一升運動でご喜捨いただいた浄土には、阿弥陀仏の慈悲、浄土宗滋賀教区所属寺院並びに檀信徒の被災された方々を応援したいという尊い気持ちがこもっているので、「何食分もの価値がある」と言い張りたい。

2、活動の意義

報告者は、「近江米一升運動」の特徴と意義として、次の三点が挙げられると考える。

一点目は、寺院がこれまで培ってきた親密な「寺檀関係」と「寺院相互の関係」（教区）という伝統的な信頼関係のネットワークを活かした活動（福祉実践）を創出したことである。このことによって、寺院固有のネットワークが一種の社会資源・地域資源であり、社会活動・福祉実践の基盤となり得るものであり、それ故に、寺院が公益性・公共性を有しているということのある程度証明できたのではないだろうか。

二点目は、寺院（の活動）が地域（滋賀）と地域（被災地）を繋ぐ（滋賀の住民〈檀信徒〉の施米に込めた被災者を応援したいという思いを被災地に届ける）橋渡し役を果たしていることである。

三点目は、寺院（の活動）が NPO（フードバンク）やその他の団体（被災地や他の地域の青年会・ボランティア団体）との協働による被災地支援体制という「新しい公共」のかたちの構築の一翼を担っているということである。

以上の三点は、従来の寺院の社会活動にはあまり見られない大きな特徴といえるのではないだろうか。

3、今後の目標

これまで、多くの寺院と檀信徒の温かいご理解と絶大なるご協力のお陰で、また被災者の方々からいただく笑顔と、「食べ物の中でお米をいただくのが一番ありがたいです」「年々ボランティアで訪れる人が減り続けているので毎年来ていただけて嬉しいです」といった感謝の言葉に励まされて、近江米一升運動による被災地支援を継続してこられた。

できることならば最低 10 年（あと 5 年）、できれば被災地から仮設住宅がなくなるまで活動を継続したいというのが、報告者個人の思いである。

これまで活動を続けてきた中で、わずかではあるが、「いつまで続けるつもりだ？」「わずかばかりの米を運んだところでどれだけの役に立つのか？」「ボランティアははたして僧侶の本分なのか？」といったネガティブな意見が人づてに漏れ聞こえてくることもあった。

しかし、すべての事象に対して（したがって東日本大震災に対しても）自分との関わりを見出し、当事者意識（「自分が被災していたかもしれない」「いつ自分が被災しても不思議ではない」）を持ち続けようとするこそが真正なる「無我観」「無常観」であり、寺院・僧侶にはこの真の無我観・無常観に立脚して、被災地・被災者に対して決して傍観者にならず、自分にできる支援を考え実践することによってポジティブに関わっていくべき責務があるのではないだろうか。

このような信念に立って、今後も米一升運動による被災地支援に取り組んでいきたい。

昨年、佛教大学の大谷栄一先生が滋賀教区所属全寺院を対象に実施された「地域社会における浄土宗寺院の社会的役割に関するアンケート調査」によって、回答のあった 216 ヶ寺（全 470 ヶ寺の約 4 割）の内、協力している寺院は、6 割強の 137 ヶ寺であり、大多数

にはまだ程遠いということがわかり、いささかショックを受けた。しかし、この結果を、近江米一升運動の今後の伸び代を示すものとポジティブに受け止め、運動の拡大発展に努めていきたい所存である。